

令和 6 年度

学校経営方針

京都市立向島秀蓮小中学校

I 教育理念と校訓 (開校時の教育理念と校訓が引き継がれることを祈り、ここに示す)

(1) 教育理念

【豊かな人間性を育み、人間力を高める】

向島秀蓮小中学校は、「未来を担う子どもたちのために新しい学校の創設を」との地域や保護者の願いのもと、9年間の学びと育ちのつながりを一つにした新しい施設一体型の「義務教育学校」である。

地域の人々の願いや協力によって支えられる本校教育においては、地域の人々と連携し、共に地域の子どもたちを育していくという使命感をもって、教育活動を地域全体で推進していくことが大切になる。義務教育学校として、新たに本校の教育が発展していくために、向島地域の歴史や取組、地域住民の学校への思いを受け継ぎ、家庭・地域社会との連携・協力により、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、「変える・変わる そして輝く」のコンセプトのもとに「学校が育つ 地域が育つ 人が育つ」学校教育を推進していかなくてはならない。

社会に目を向けると、子どもたちが生き抜いていくこれからの中は、IoT や人工知能等の情報技術の進展やグローバル化といった変化が人間の予測を超えて急速に進展していくと言われている。未来を担う子どもたちが、こういった社会変化の中にあっても、高い志や意欲をもった自立した人間として自分と社会の豊かな未来を創造していく力を育むことが求められている。

本校の教育においても、10 年後、20 年後の社会情勢を鑑みながら、「意欲をもって自ら学び、考え、表現する力」を身に付けるための学びを軸としつつ、「一人一人の未来を拓く力」の育成を図っていかなくてはならない。また、社会がいかに目まぐるしく変化する時代になったとしても、生きていく上で大切にしたいことを、自らを律しつつ、他者と協働し、たくましく生きるという「人としての在り方」を実現させることを考えている。そのため、「誠実さ・謙虚さ・思いやり・感謝・純粋な心・挫折に負けない心」といった豊かな人間性を育むことを教育の柱とし、その人間性を持って、社会変化に対応できる「知・徳・体」のバランスのとれた人間力を高める教育を充実させていかなくてはならない。

最後に、義務教育学校として開校した本校では、9 年間という今までにない長く連続した期間の中で、子どもたちの学びと育ちをつなげていくため、授業の質を高めることをねらいとした学習指導要領の改訂等教育改革の中で果たす役割は大きく、義務教育 9 年間を見通したカリキュラムの系統的な指導を実践し、心豊かで、学び続ける姿勢を持った人間の育成に寄与する。そして、どのように時代が変化しようとも一人一人が豊かに生き抜いていくために「豊かな人間性を育み、人間力を高める」という教育理念を掲げ、その理念を創造・実現させていくためには、本校教育に携わるすべての人が使命感と情熱を持ち続けていくことが大切になる。

(2) 校訓

【「自立」「清心」「貢献】

自立:①主体的に学びに向かい、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができる
人間の育成

②困難を乗り越えるたくましい心を持ち、他者と助け合いながら協働できる人間の育成

清心:①美しい蓮の花のように純粋で清らかな心を育み、誠実・謙虚で思いやりのある人間の育成

貢献:①地域や社会に向き合い関わり合い、自己実現を目指すとともに、社会のため人のため行動できる人間の育成

②「人とつながり、ともに学び、支え合う力」を高め、より良い自分、より良い社会の実現のため自ら考えて行動することができる人間の育成

II 教育目標とめざす生徒像

(1) 教育目標と資質能力

《学校教育目標》

「他とつながる力」・「未来を拓く力」の育成

～果敢に挑戦、知らない自分に会いに行け！～

< 9年間で身につけたい資質・能力 >

- | | |
|---------------------|---|
| ・ 考える力 | =・主体的に課題について学び、知識を生かし、多様な考え方につれ、課題解決に向けて考えることができる。 |
| ・ 発信する力 | =・相手にわかりやすく自分の考えを伝えることができる。 |
| ・ コミュニケーション力 | =・考え方や立場の違いを理解し、自分の考えを論理的に話すなど表現することができる。
・相手の考え方を理解し、受け入れるなどして、相手とのつながりをさらに深めることができる。 |
| ・ 折れない力 | =・失敗を恐れず、たくましく挑戦し続けることができる。 |
| ・ 多様性を受容する力 | =・他者への思いやりの心を持ち、多様な人とのつながりを大切にし、共に生きていこうとすることができる。 |
| ・ 自律的活動力 | =・折り合う心を持ち、自らを律する力を身に付け、誠実かつ実直に行動できる。 |

学校教育目標を実現するために重点化した6つの資質・能力は、9年間を見通した「学びのつながり」「育ちのつながり」「人・地域とのつながり」の3つのつながりを核としたカリキュラムで学び、「学びを習得していくプロセス」や「学校教育全般の中においてひたむきに取り組む過程」の中で、結果として身に付くものとしてとらえる。目指すは自立した社会人としての必要な基礎力でもあり、どのように時代が変化しようとも豊かに生き抜いていくために必要な力となる社会性と主体性の育成である。

(2) 目指す学校像

本校に対する地域・保護者そして生徒の期待感は大きい。生徒一人一人の良さが生かされた「居場所」、励まし合える仲間がいる「温かさ」、互いを想いあえる「幸せ」を合言葉とした学校づくりを通して、生徒がいつも「通いたい」と思える学校の実現を目指し、地域・保護者の期待に答える「通わせたい、信頼のある学校」の実現を目指す。

- ・一人一人が大切にされ、個性あふれる温かな学校
- ・「なりたい自分」と「確かな学び」をつなぐ学校
- ・家庭、地域とつながり、ともに育つ学校

(3) 目指すステージの生徒像

卒業までに 実現させたい姿	ひたむきに 学び続ける姿	たくましく 誠実な姿	豊かに 生きる姿
ビジョンステージ	ひたむきに学び続ける姿	たくましく誠実な姿	豊かに生きる姿
チームステージ	協力し学び合う姿	挑戦し高め合う姿	豊かにかかわり合う姿
ベーシックスステージ	いきいき学ぶ姿	やさしくすなおな姿	なかよくつながる姿

(4) 目指す学年像

卒業までに 実現させたい姿	ひたむきに 学び続ける姿	たくましく 誠実な姿	豊かに 生きる姿
9年	未来を拓くため、あきらめずに、ひたむきに学ぶ9年	学校のリーダーとして、努力を支えあい、喜び合える9年	学校全体のことを考え集団の向上を体現し、憧れる9年
8年	社会とのつながりを意識して新たな挑戦をし、学び続ける8年	未来を考え、夢やなりたい自分探しに向かって集団で努力できる8年	所属する様々な集団と、自分自身に誇りと価値を見出せる8年
7年	学ぶことに希望と価値を見出す7年	TSリーダーとしての姿を探し求める7年	多様性を受け入れ、集団の向上を発信する7年
6年	何の為に学ぶのかを考える6年	自分たちで考え、実践することの楽しさと難しさを学ぶ6年	社会とのつながりの中で貢献の価値を探す6年
5年	自分の学習を調整することを学ぶ5年	失敗を恐れずチャレンジする5年	社会とのつながりの中で思いやりの心を大切にできる6年
4年	学びから逃げずに、楽しみながら基礎基本の定着を目指す4年	相手のことを考えて、自分の言葉で思いを伝えることができる4年	BSのリーダーとして、みんなが楽しいこと考え方発信する4年
3年	繰り返し学ぶことで達成感を感じる3年	人の話を聞き、自分の思いを伝える楽しさを感じる3年	学年が楽しいことを考えられる3年
2年	助け合って学ぶことの楽しさを知る2年	失敗しても大丈夫、みんなで応援できる2年	みんなが楽しいことを大切にできる2年
1年	みんなで学ぶことの楽しさを知る1年	素直に一生懸命に頑張る1年	自分と友達を大切にできる1年

(5) 目指す教職員像

- ・義務教育学校である、本校の与えられた使命を常に意識し、校種、教科や担当の枠にとらわれない取組を実践し、「変える、変わる」を体現する教職員集団
- ・自らが多様性を受容する力を身に付け「自分らしさを探究する過程」を支えることを大切にし、生徒の伴走者であろうとする教職員集団
- ・報告連絡相談を基本とした連携を図り、自らの職責に誇りを持ち、主体的に学び続け、切磋琢磨し成長する教職員集団
- ・生徒、保護者、地域とのつながりを意識し、それぞれの立場の思いを想像し、互いの幸せを考えられる教職員集団
- ・母体集団が大きいことを強みに思い、互いにフォローしあい、それぞれの良さを生かせる「和」を大切にする教職員集団

(5) 生徒・教職員共通スローガン

教育目標および目指す姿の実現に向け、生徒と教職員の共通のスローガンを次のように掲げる。

「生徒、保護者、地域、教職員にとっての幸せな学校づくり」

III 学校経営方針

- 地域の期待を背負ってたつ学校を経営することに誇りをもつ。
- 全教職員で教育目標の達成及び、6つの資質能力を目指すため、以下のように方針を示し、義務教育学校だからこそ実現できる新しい教育を全教職員で創造していく。

《確かな学力》

- 学力向上プロジェクトチームを中心として、全教職員で学力向上を必ず目指す。

○自己調整力（主体的な学びの三要素『学習方略・メタ認知・自己効力感』）の育成

- ・反転学習を効果的に取り入れ、探究活動や対話的な学習につなげる。単元構想を練ることにより、反転学習の内容や時期を決定するとともに、練られた単元構想を生徒に示すことで、単元の目標および各時の目標を見える化し、主体性を持たせる一助とする。
- ・日々の授業と家庭学習との一体化を通して、自学自習の習慣化を図る。また、デジタルドリルや自学自習シートの活用等を通じ、自分が必要とする学習課題を的確に選択して取り組む力の育成を目指す。
- ・総括考查や評価を通して、生徒のメタ認知、学習方略の一助とする。
- ・ふりかえりを起点とした学びを重視する。

○授業づくりの視点

- ・担当する「教科の見方・考え方」について、教師が自分の言葉で話せるようになる。
- ・「資質・能力の育成」を目指し、前後期課程合同教科会を主体とした「主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善」を推進する。
- ・生徒が学びを実感することができる機会に注力するため、体験活動を含めた単元構想を行う。
- ・総合的な学習の時間をはじめとする教育活動全般において、探究的な活動や課題解決学習を軸にし、主体的に学ぶ姿の実現をめざす。また、課題解決に向け粘り強く取り組む活動を企図し、「折れない力」の育成を図る。

○総合育成支援の視点

- ・総合育成支援の視点を常に持ち、理解と認識を深め、生徒が自分の苦手なことに劣等感を抱かずに、取り組める支援と周りの生徒を含めた学習環境を整える。
- ・個別最適な学びと協働的な学びにおける効果的なICT活用の研究に取り組む。
- ・生徒を観察し、生徒の反応や振り返りから、学びの状況を的確に把握し、指導の改善に生かす。
- ・個別の指導計画等を利用し、個別に有効な教材や指導方法、ICTの活用等により、個に応じた適切な支援を行う。

○基礎学力の育成に向けて

- ・チャレンジタイム、帯時間を、基礎学力を養う重要な時間ととらえ、朝読書等の取組の充実を図る。
- ・4年生までは、基礎基本の確実な定着を目指し、繰り返す学び、書くことの重要性を認識し、これらの取組みが苦痛だけを伴うものではなく、達成感を伴う取り組みにする。

《豊かな心》

○「人間性を高める」を実現し、「多様性を受容する力」を育成するために、人権教育や道徳教育を推進し、「いのち」の大切さや人権尊重の理念を正しく理解するとともに、「子どもの命を守りきる」教育活動を全教職員で進める。

○学校は失敗が許される場。学習者目線に立ち、生徒が自分らしい生き方を探究するための機会となる教育活動を展開する。

○生徒指導の4つの視点（自己決定・自己存在感・共感的人間関係・安全安心な風土の醸成）に基づく教育活動を推進する。

- ・生徒への問い合わせ・提案を重視し、生徒に内在する思いを引き出す丁寧な指導を行う。
- ・「させる生徒指導」から「支える生徒指導」への転換を自分事として取り組む。
- ・「自尊感情」を高めることを中心に据え、対話をもとに一人一人の心に寄り添った指導・支援を心がける。
- ・「主体性」を高め、自立活動力を育成する生徒会活動を推進する。

○人権教育の4つの視点（「人権としての教育」「人権を通した教育」「人権についての教育」「人権のための教育」）を意識し、様々な教育活動において人権教育を行う。

- ・育成学級における生徒一人一人の個性・資質・能力を最大限に引き出し、学習や生活習慣の定着を図るとともに、自立した生活ができるように指導する。また、交流学級など連携を深め、児童生徒間の連帯感を高め、共生社会に向け、共に学び合う意識を育成する。
- ・道徳教育を要とし、生徒たちの相互理解を深め、心豊かな人間を育成する。
- ・デジタルシティズンシップ教育を推進し、デジタル技術の利用を通じて社会に積極的に参画しようとする姿勢や情報モラルの重要性を学び、誰にとっても幸せな使用の仕方を育成する。

○学年、ステージを超えて異学年がともに活動し、学びあい、成長する教育実践を進める。

○9年間の伝統文化教育を通じて、大切に受け継がれてきた伝統文化の中に生きている良さを感じ、文化を継承する心と態度を育成する。人間性を高めることをねらう。

○SDGsの目標達成を視野に入れた教育活動を実践する。

《健やかな体》

○本校で目指す学びと心の成長の基盤は健やかな体であることから、日常的に生活習慣や体力の向上を目指した取組の充実を図る。

○自分の将来を意識し、自分の体や心を大切にして、より健康に生きていくために、年間を通して生活全般における指導（性に関する指導・飲酒・喫煙・薬物乱用防止教育・歯と口の保健指導など）を行う。

○睡眠に関わる調査や面談などを通して生徒の睡眠にかかる意識改革や取組を重点化する。

○給食の時間を「楽しく会食する時間」として位置づけ、他とつながる力の育成のための場として取り組み、食材を生きた教材として食育を推進するとともにつつましい食習慣の確立をめざす。

○体力向上の活動を通して、楽しさだけではなく厳しさも体験し、それらを乗り越える逞しさ、折れない心の育成に努める。

《学校運営》

○多くの教員が生徒と関わり、重層的に生徒の成長を支援する体制として、全学年で教科担任制、学年担任制を実施する。

○地域の就学前施設とかけ橋期の子どもの育ちへの願いを共有し、互いの教育・保育の接続が機能するよう取り組みを進める。

○学校運営協議会を軸に保護者・地域との連携を密にし、協働しながら社会に開かれた教育を推進し、地域貢献に取り組み、地域を大切にする心を養う。

○学校だよりやHP、学校公開などを積極的に活用し、教育活動を地域、保護者に発信する。

○校務の効率化、業務改善の視点をもって学校運営を行い、働き方改革を推進する。

○アンケートや学校評価等を軸としたPDCAサイクルを確立させ、教育課題を明確にしながら改善を図っていく。

IV 教育の特色と内容

一貫教育を「教育の手段」として捉え、以下に示す 3 つのつながりを意識し、積極的に活用する教育活動を実践する。

① 異学年のつながりを用いる

- ・同学年同志の活動では得られないものが得られる。
- ・社会では、物事を異年齢の人と協働して達成していく必要があり、異学年とつながる経験が大切となる。
- ・上記2つについては、年齢差が一定ある方が効果的であることが多い。
- ・横の繋がりでは、リーダーシップを発揮できない子も、縦においては発揮しやすい。また、その経験が今後に生きてくることが多い。
- ・ピア活動・生徒会活動・部活動などを中心とした取組みは、自尊感情を育てる有効的な手段である。

② 学びのつながりを用いる

- ・9 年間を見通した指導ができ、6 年生をゴールとするのとは異なる結果が得られる。6 年生までを知らずに教育活動を行うのとは異なる結果が得られる。
- ・9 年卒業時を意識させる指導ができ、さらにその先にも目を向けることが可能となる。
- ・教える経験をさせることができる(教えることが一番の学びであることを生かす)

③ 地域とのつながりを用いる

- ・保護者・教職員以外の大人(地域)に育ててもらう環境づくり。小学校までは地域との連携は進むが、中学校では進まなかったこれまでの教育の結果を踏まえ、地域にも 9 年間で育ててもらうという風土を醸成する。
- ・比較的地域との連携が進んでいる小学校の視点から考えても、知るべき地域の範囲が広がり、それに伴って人とのつながりの範囲も広がる。ゆえに、教材や人材としての活用範囲も広がる。知ることにより、地域への愛着高揚もねらう。
- ・総合的な学習の時間を中心にして地域貢献(防災教育・ボランティア活動を含む)をテーマに学習活動を進める過程で、自身の住む地域やそこに住む人々を知ることで「地域を誇りに思う気持ち」の醸成をねらう。
- ・京都市・そして向島地域が所有するところの「学校」の使命は地域貢献である。
(一般企業の使命が「社会貢献である」と同様。)

京都市職員としての自覚

最後に、京都市職員であること、教育公務員であることを忘れずに学校教育を遂行するために、「京都市職員の倫理を確立するための行動規範」を、ここに記す。

- 一. 公私にわたり、高い倫理感を持って、行動します。
- 一. 市民の目線に立って、仕事に全力投球します。
- 一. 法令等を遵守し、不正を許さず、公正に仕事をします。
- 一. 情報を市民に分かりやすく伝え、説明は丁寧に行います。
- 一. 自己研鑽に励み、絶えず改革に取り組みます。